和歌心部抄

543
ワ
37

543
ワ
37

九大図書

九州大学図書館
昭24.7.13
184097

巻

近代秀歌　定家卿作

正風躰抄

京極黄門庭訓抄　一冊也　衣笠内府公送進

八雲口傳　号詠歌一躰　為家作也

四條房口傳　号阿佛

近代風躰抄　二条摂政良基公作也

おほく人乃言はいゝやうみえしきまゝのるこ
とゝれぬ侍らしかはおろかなるこゝろは
をはりまおもひしをきまいるこゝろはかきあら
ましいはこゝのあらすたゝ詞もかき
はちかくはるゝ見ぐ間をこそなきよ
ものゝことなる
やまとうたの道あさきに似てふかくやすきに
にてかたしわきまへしる人又いくはく
ならすむかし貫之哥の心たくみにたけお
よひかたくとはつよくすかたおもしろき

さまをこのみて余情妖艶の躰をよまず
それよりこのかたそのなかれをうくる輩
ひとへにこのすかたにおもむく但世
くたり人の心おとりてたけもおよはす詞
もいやしくなりゆくいはんやちかき
世の人はたゝおもひえたる風情を三十一字に
いひつゝけむことをさきとしてさらに
すかたことはのおもむきをしらすこれによ
りて末の世の哥は田夫の花のかけをさ
り商人の鮮衣をこのめるかことし

しかれとも大納言経信卿俊頼朝臣
左京大夫顕輔清輔朝臣ちかくは亡父卿
すなはちこの道をならひ侍りける基俊と
申ける人このともから末の世のいやし
き姿をはなれてつねにふるき哥を
こひねかへりこの人〳〵のおもひいれて
すくれたる哥はたかき世にもおよ
ひてや侍らむいまの世となりてこのいや
しきすかたをいさゝかかへてふるきことはを
したへる哥あまたいてきたりて花山僧正

在原中将業平小町ハ歌人なるゆゑ
さまざま作りてみしきこゆるごとき作れは
ものかたりにかきしるしたる人ハあまたしき
こと出来て其の人ちかく心をとゞめを
作りし　但これらの歌学未生由しに
歌よのことくいくつの由しのまゝやあん
多くきこえくきをいしてやらるゝまゝ
きらんくれまゝるとは作るらく
似の歌はもとこゝるにやが前あまあく
なるとく作るまゝやこの道はなきもあ
あらし人かれがまとさくりくけるへし
ごけるにハ学さもと人あるゆゑ作りた言はの
名たるまゝをはそく武用とまあるとは
うたれ作れとも又今ちはこの心か
家くまつるへ人のゆるさるゝとは作りて
くるまゝれまるしはれの作りたなる
ろうるるまゝやの庭のきしへゆそてハ歌のいふ
くみとをしきて見らくあるは歌心おいて
これるけるもの歌をとりかゝる作
かとろかはまことなるをきやわこけくたなる

去月こそ芭蕉翁は人や花のつみく
後は病もなりくうまんでゆく去けん
師とかたいし筆の花を残し玉ひける乃
いはんうるりとかわるものをいろくわりし
けるこそ芭蕉翁のまことにいよく記
かくなく心にて作るもかきつくへなわ
うるる心はさらにれぬ句を好みともまだ
うつ残はさつつ作るなるを細やかなるき
を去りし心にあそびまつ残りとめをよは
ねそ。きたるる残れりしく寛平の昔乃
事ともなるはそのけぬよろつきさへもとまる。
作りけんあるき残いれ子すこうそ
しりの字はと季や残あるくめよみをたる
をするうち中ゆとすとやなるを段中を残
やみぞそ人は五七五の七もの字残さをか残
きたく七との字残おすくけは字つれはあるる
しきをすときくなさわめごころうけは
五七の句はやうかりて作るるまやたし
たくはいろの見ゆるきこころやこほしきけ
なるやさ月ひさこるのあきみかくやさむ末こ此

みちゆき人へまとゐ事はいく度ともわかねは
まそみ言いてくれかしとのちにまゝ其は
きこえたまひ袖ひちてむすひし月やあらぬ
いろやむかしにかへりて花の香風なしとも
よしやかくて心にまかせたるにいとあはれ
ふかくおもひけることのはをこゝにしるすこ
もの・きこえいさゝかのまことをそへてしるすゑ
一すちにもろもろの人のみちをたとりて見んとなれは
めてたくおもひしらへ侍るなれ
そもそもこの和歌の道ひろくさかえやまとことの葉
人のこゝろをたねとしてよろつの言の葉とそ
もとしさ為よもなし法のことも御ゆるし
いはんや難義なとゝ申事はあらはにすへし
所にはかなきもあるましき事をこゝにしるすこ
ゆるしたまはゝさきの事御ゆるしたまはる
まさき人やことに貴人のかたまにあらはめる
ものまかはまさに侍るところの人を御られは
ましめてたまはりたまはりて化家の人
読いまゝこのかけるこそ侍るへし

大納言師信

夕されハ門田の稲葉おとつれて芦のまろやに秋風そふく

君か代ハつきしとそ思ふ神風やみもすそ川のすまむ限ハ

奥津風吹にけらしな住吉の松のしつ枝をあらふ白浪

俊頼朝臣

山桜さきそめしより久方の雲井に見ゆる瀧の白糸

落瀧津八十宇治川の早き瀬に岩こす浪ハ千代の数かも

是ハ晴の哥長歌の本躰ともいふへきにや

鶉鳴まのゝ入江の浜風に尾花なミよる秋の夕暮

ふる里ハ散紅葉ゝにうつもれて軒のしのふに秋風そ吹

是ハ幽玄に面影かすかにさひしき姿也

あさましや剣の枝のたわむまてこハ何の身のなれる成らむ

是ハ草案来て強く白居のたくひなきにてハあるましきにや

是ハ面白く又二面ある上手の姿まして云躰

うかりける人を初瀬の山風よはけしかれとハ祈らぬものを

ことはれむかしの事ゝ見てゝ桜あまたの夏よくさきめくられ

是ハ心ふかく言葉心にまかせて学ふ共

やすくいひつゝけかたく誠にをよふましき

姿なるへし

顕輔卿

かつらきや高間の山の桜花雲井のよそに見てや過なん

あき風に立ねしや千さはに浅ませる月の新やけさ
高砂の尾上の松に吹風の音のみや関守る人よ
清輔朝臣
多くの森乃杉の末乃葉乃しく露さる月の影やさやけき
難波人もしくも岸の下ゆの松人に忘れぬきし秋かせわ
なりし人は又こそしろや世に忘んとしくは見てれ今は立かお
基俊
あしたより伊勢の浜荻打わきて妹と寝てとる月ぞ淋しき
契りおきしさせもが露を命にてあはれ今年の秋もいぬめり
先人
又やみむかた野のみのの桜狩花の雪ちる春のあけぼの
世の中よ道こそなけれ思ひ入る山の奥にも鹿ぞ鳴くなる
住わびて身をかくすべき山里にあまり隈なき夜半の月かな
立帰りまたも来て見ん松島や雄島の苫屋波にあらすな
思ひきや榻の端書かきつめて百夜も同じまろ寝せんとは
伊勢みきむ宮の八廣して宿りあはむ道の枝は今の暮れて
こゆうらに深山もう小さや寂よすき
たくひの下ゆれ清らの月さき伊勢の浜
萩かやうの音をこつまて知るか新さむよ
よめかもくしくは寝くきこゆれ

もかくまとふるなるを世よりおほくされ
秋よみけるうたこそ波まのまにに
きゆるなみもやすさしきちゝに
あをはくとは風の音吹清風
ちれ雲たちやうなるもの絶え
とふやなるもとてはゆるしも
絶れはむすかくみやうに絶れとかて
さて心はその花の香にしみて

正風新抄

千載集

第一春歌上

春夜は軒ばの梅をもる月の光もかほる心ちこそすれ

十首歌人々よませける時花の歌

[illegible]よめる

みよしのゝ花のさかりをけふ見れば越の白根に春風ぞ吹

第三夏歌

[illegible]のつれ〳〵なるほとゝぎす[illegible]の声

[illegible]よめる

すきあるゝ窓にも我祇園の郭公嫌ハ枕とある心ちなし

夏の哥乃中ニ

五月雨ハそゝくの絶ゆちるめちほれまさる[illegible]蛍

いたくてさゆくやハあめ年月かミつきて経る哉 二首

第四 秋哥上

いと倉峰ニちらしまし露わきいろて秋の夕つきさし

夕されハ[illegible]のあきさをみせしみて帰之後京の

石ハ[illegible]清瀧川にすめる月影

第五 秋歌下

男[illegible]百首哥読侍ける時雲の[illegible]て

[illegible]

さゝ[illegible]心も[illegible]

あきの哥とてよみ侍る

藤原定家

[illegible]

第六 冬歌

冬きてハ一夜[illegible]

崇徳院に百首哥奉りけるに

後京極の哥とてよみ侍る

[illegible]なる[illegible]

僧位法師人にすゝめて百首哥よ
ませ侍りける時に時鳥の哥とてよめる
志くれけるまやのやのきはのなきこゑにやまてほし入日の影
と題にてよめる
まさ哉南風の雨のはれ帰る雲の□から月はのこれと月や
月さゆる和哉上にある雲は心くもりてくもる田の里

第七　離別歌

百首哥よみ侍りける時わかれの心をよめる
別ても心やかよふ稲葉山いくたび越ゆる山路かな

第八　羇旅哥

浦傳ふ磯のとまやの梶枕聞もならはぬ浪のおとかな
あはれなる旅の浦の唐衣きてこそ浪の□□

第十　賀歌

千とせ君かみゆき所をゆきて侍りけるを
摂政太政大臣に侍りける時百首歌よませ給
ひける時　祝哥五首のうちによみ侍りける
百千度浦島の子はかへるとも藐姑射の山はときはなるへし

第十一　恋一

ねかひあまて百首哥よみ侍りける時によめる
恋の心をよみ侍りける

じりする筆山のもとろ此下露やいくらか袖にかくらん

志ゐ上哥

いつみきとも言むの八語と宿のゆる哥の書すうそ宿ま[illegible]

第十二　哥二

ごしやちゝの何かおくつめて百首わすれ給きん

第十三　哥三

法性寺散ゆくと五月法花のをのこ帖も

前より人給きる時　契後隠哥こいくる心紙

よみ給ひきる

あめあひかなくの道芝夜すりいつとなく人のすの[illegible]

こゝろすよ世ゝの契りもなけれやみの住の宮

第十四　哥四

哥紙のこ志の腹の市にかくみかみの心いさかならぬ

梅段哥ん居のじ紀家の前々年哥ね心紙

よ御人て

あ事は方紙人て帰よ縁ときよ世て流人はまそ出てお

第十五　哥五

杉山の岩垣ぬまの浮きあ縄布のとき哥ちと御そ人

数すの風ここそそくの瀬も哥は梅きあゆきそる

定家

ちらりのゑ哭のゝ中にもかつわきる山をまへ人にかたりこし

第十六　雑歌上

山家の月といへる心をよみ侍ける

住わひて身をかくすへき山里にあまり隈なき夜半の月かな

殷富門院大輔百首歌よみ侍ける

ころ月の歌とてよめる

いかさまにけふそうき世はさまよひし月もかはらぬ[illegible]

二條院御時只代まて侍ける事を

おもひてよめる

侍るわさまらてに年經るにはあらす[illegible]

第十七　雑歌中

遁世の後花の歌とてよめる

雲の上に春そゆたりしき花はあれとも[illegible]を

花さかりけれはにほいも立て金堂のまへ

のさくらのちりかゝるをみて読侍ける

なかいける昔を[illegible]花ちるのまはあらし[illegible]

僧位法師の十首歌侍ける百首歌の中

に花の歌とてよめる

いにしへの風流をしのふ世をはいとはしき[illegible]

述懐の百首歌の中に小野の宮の歌とてよめる

うき身はなかなかまてこそ出かくれしこの世の後もおもはや すけん

述懐の百首歌よみ侍けるに紀康の

女にてよめる

世中ハ道こそなけれおもひ入やまの奥にも鹿そ鳴なる

今上の御時五節のかし御匣殿あや

まちあるき侍しけるとあそ

殿上のをのこあまた侍けるかの

蔵人なるものゝみやうしの清つら

院よりきこしめしてまかりたまはす

うちより御こしの御かへしにつかはしける

あるきのやうさしけれは年暮て君をたのむや隔なくよ

第十九 釋教哥

法師品漸見湿土泥決定知近水の心を

よめる

むかしやかて見えしかねの井をたゝ心のちかき水のゆくへを

勧発品の心をよみ侍ける

ちらさるも文殊そしはるゝ法のしるしの誓ひの花

第二十 神祇

たかし社の歌合に月の

心をよめる

さゝ船にのはちるさくらは岩波にあらはれてくるあさの月

新勅撰和歌集第二

春下

前関白家歌合に雲間花といふ心を

よみ侍りける　　左京大夫

名もしるし峯の嵐も雪とふるやまさくらとのあけぼのの空

　　　　　　　　右衛門督為家

立ちこむる梢も見えず山はたゞ花のかをりに匂ふ白雲

第三　夏歌

寛喜元年女御入内屏風

久堅のかつらにかくるあふひ草そらのひかりにいく世なるらん

寛喜元年十一月女御入内屏風に郭公

よみ人しらすとある　右衛門督

なにとき此歌の思ひ続くれはあの次かくて山郭公

第四　秋哥上

おとたてゝ今は吹ぬる我宿の荻の上葉乃秋の初風

養和乃ころほひ百首哥よみ給ひける秋歌

あはれなることハかゝる色もなし秋くる月のいかにぬらん

後京極摂政左大臣よみ給ひける時月哥

首哥よみ人給ひけるとよめる

ぬれし文秋の寺もるあへしかくてうす月の影きよきを　うつハ

第五　秋哥下

うき世の秋のこゝろくと秋十首哥に浮ひうすつゝ

もろきゝ　右衛門督

乃了昼の森乃木葉も色はさあふうき世の中に秋ハ来ぬらん

閑白左大臣家百首哥よみ給ひける

河面にうかへてさゝ浪はさる秋の日まさにくらまの山にやまれ　うしめ

第六　冬歌

冬の哥讀　給ひけるに

右衛門督

冬きては河風とやの梢のさくにしもの下葉やかるれは　うる紀

浪清庫風不清しる源河冬

ちりまかふ花によそへて[illegible]のかさしに[illegible]

第十一　恋歌一

松の[illegible]の[illegible]神の[illegible]

右兵衛督

おく山の[illegible]の[illegible]人[illegible]

第十二　恋歌二

建保五年庚申に久恋といふ事を[illegible]

[illegible]

[illegible]年[illegible]

第十三　恋歌三

よしさらば[illegible]の[illegible]

[illegible]山の月

續後撰和歌集

第一　春歌上

建保二年詩歌を合せられ侍りける時江上春望　　参議為氏

人とはゝみすとやいはむ玉津嶋かすむ入江の春の曙

第二　春歌中

洞院摂政家百首歌に花

明やらぬ外山の[illegible]桜の[illegible]花咲ぬらしかゝる白雲

あさ[illegible]しめてん[illegible]さへそ[illegible]

花乃哥の中に

をとめこかかさしの桜さきにけり袖ふる山にかゝる白雲

第四　夏歌

あまのはら[illegible]月[illegible]

第六　秋歌中

秋毎になくさめかたき月[illegible]やとりの

第七　秋歌下

寛元元年女御入内屏風に紅葉

立田やま[illegible]みちの[illegible]松の色さへ[illegible]

建長二年九月詩歌を合せられ侍りしに

山中秋興

ふめともあ原何るてもらはぬ空をなかめさと　松風ぬ

第九　神祇歌

入道前摂政家歌合に名所月

昔は神代のかけ見る人の心とめて今もすみける杉のはの月

今しめひく三輪の杉村かはらすや是や神代のしるしなるらん

大納言となりて悦申日春日社にまいりて

よみ侍ける

老らくにみかさの山をあふきつゝあまりはてぬ神やうらん

第十一　恋一　五首

ちらぬはは心いるとや歌くることもいかてかみゆるらん　[illegible]

参議

第十二　恋二

恋乃歌の中に

あふまての恋そ命となりにける年月なかき物思ひとて

第十三　恋三

いはぬより人のむさへかゝりきにしのふれはくそ[illegible]

夜もすからのおもしなくはうきをみといひてうらみまし有明の月

みすのまの風[illegible]心はゆきてこゆとも

第十六　雑歌上

名所の歌あまたよませ侍し中に

ちかくの難の鴻ハ白妙の浪にまてうちかへるなとこそ　しるきれ

以恵雲院殿御自筆本にて書写遂

一校畢

毎月乃御百首続て御見せさしめ給ぬ化にみ
度の御事とも思ひまゐらせ候あまりかたしけなく申候ハ
あまりなる事かなとまふしはきいかはかりの御心もち
さいはひにて御ゆかりの御事ゆゑにて口つまる先人
のかたきより庭訓のかたはしをも申侍りて
きゝはしめて後の世のかゝみとも申けるよし
なからへてきえ侍らぬ御心やしきとの御事も事の
ほかなる人つみはるさはりましくなりてかなしさ
覚えさせ給て此御歌ハそれを見とそくるし申候
まいらせ候へき御事をこゝかしこ勒探をみえし

て代々にかくれまてゆきさひもなつしかは我
は心え侍へるなれとも又勅撰の前なれと
やくやうの頃にすこしよまこゑへつらは頃
人のこゝろなしをきさりしなかの世殿又
侍りき万葉集はけふ代々あれと心
まして此をまいまで一とを及へりけ頃こそみ
初心の時代みれりとも古代をかすめあへる
但し昔はかきかさねるまて風骨よみさるまて
後は又万葉の様式なさけれん好は宗の
事にそれ御ほめるけれはこの後もしいもあきら
務詞侍るかりしょうしさ後の詞もしかれ
く俗にちゝく又なりかし宗める類をよし
道のわかれはしと定めりに及ひとも此古て小家
流の為く此古首の歌の古風みえて侍る
かしかゝ猶にとをは又退屈やらんすもは
猶となれとも古りしは捨てあるつとせしき
はくゆし二一歳年はゝのそときさめてとの和を
たるうさて御詠作あるらくゆ元の後は
勅作十禅の中此幽玄様事下紀様
濃様有心体こなしゝのにてそくらは此秋も

との中にもあるめつらしき竹ともはいまつ人
くれ竹ハ友竹なり竹もくるしからぬ姿
かるくたくすかほとやわらき姿なきに
自然にあらはしてめて後ハ長き根其根
両白様有一節横濃様なりやうの竹也
いとやすきゆへ梅花竹なりやすくま
なしわらきかへるうるまるにて練磨の後
いなとしかよわれし絵もさうしかやうにも
墨画ハ梅花様かこ竹の勝私にてあるまいく
まうし侍るかたわれのよ人かくされ姿にて侍

なくし先竹ハ和国の風にまかはらぬ
筆指みくしく書をするなとやうく
物あはれなしきへき事ともみえ侍るけれハ
不相応しうゆきこものかはなくて竹よし
又是れハ優美閑なるあたくも侍るへし
かりとらしやわらき花と風をまとやうに
物なにかはしもとめしいつの根か伸
此十株の中にいはれにて有忠
よくのかさし物を得かゆへに
きハめて心ひくうにさ風うさ風にてなれ

はやく〳〵言ひ出しからハ能〳〵心にかけて
しるべの一境に入りてこそまことの歌
なる事侍るにや。されバ五音相通の事に
心をつけきかざらんためなり。又歌く
ころはいまむかしくわしくさせば人ぼの
の井の内の事にて思ひ廻らしの姿は心をとらぬの
は心のおきどころをいふなり。てうみ芸能の事あり。能々
此境はゆくしも大事にては御座候よく斟酌あるべし
歌よふことそ此道は成りがたし。人はいかで
なのめならず執する心なくて未練より人をなる

事多く、かへって歌の所にて人を案じて人の
難をのみいひつのれば返る因縁にならんや
又道の数寄にてもなし。人をきらひける
或は難を顔にて心を存知しもの
類も同じ。御前或は貴人の座のをにて
扨くゆるの後にも後々の人は笑ひて
その時はかへってさしなくもてなし
勅撰よりきこえし古き事も御座候やかる
きぬめしまよひきこゆ識と象にて定候
相積る萬も前にも能く詠吟

しかし侍るへく一ふ也沈思の事はいかにもすへし須
後に難侍るへし殊に心ある躰の哥は
思ふからすあるへからし但し此体よむ時の
よまれぬ時侍る也朦気侍りて心の底か
かはしき折はいかにもよまんと案すれとも
有心躰の出来すそれをよまんとし侍れは
そのき侍れはいよいよ性骨もよはりて
正体なき事侍る也さらん時は先景気の哥とて
姿詞のそゝめきたるか何となく心はなけれ
とも哥さまの宜く聞ゆる様をよむは

少なくは常体の事にはとき心うつきこゆまて
不れ侍ることも四五首よみ候へは朦気散
し性機麗しく本躰にてよまるゝ
ますては又恋述懐なと申題をはひとへに
ゆるゝ心躰のみよむへしこれならては
此躰をもては直かるましき事にて候これもさも
こゝろえんには躰は家の九躰にわたりて侍るへし
そのゆへは幽玄にも心あるへし長高にも又
心侍るへし残の躰にも又めてたく
何の躰にも実は心のなきはわろきにてそ候

今此十躰の中にハ有心躰こそ歌にはへらね
いらして候ハ余の躰々の歌の心を見てハいらす
一向に心の躰なれハこれきこし歌よめつる
を撰ふへし歌侍るや御躰にもたゝ有心躰
を存てきこえて又歌の大事ハ詞の用捨
にて侍へし詞に付きて強弱大小候へし
それを能々見したゝめて強き詞を
ハ一かうにこれを続けよはき詞をハ
又一向に是を続けもてゆくへく侍る
かやうにさすらひつゝ関にくからぬやうによ

よろしからぬとものきこいめくる事にて侍る也
中にもすへて詞にあしきもなしよろ
きもあるへからすたゝ続けからにて歌のため
歌詞の勝劣侍るへし幽玄の詞に鬼拉の詞
なとを続けたらんハいと見くるしかるへし
きにこそされハ心を本として歌詞を
取捨せよとこそ亡父も申置侍りし或人
花實の事を歌にたて申て侍るにとりて
古の歌ハみな實を存して花をわすれ
近代の歌ハ花躰のミ心にかけて實にハ

めもかすみぬらし申やとたのむもなきよしにて
侍るへ古今序にも花心侍るやらむ
侍るまし花さて侍こみさの事ま思
指侍るまて侍りとめくし足下也心事
侍るまじや所謂実とやは心花とやは詞
かなる頃古今の詞を侍るく関ゆるを実
とやとは侍りめかしろへし今人の詠侍
にも心のたらん言葉となりかたう申は
今の人の心のうめんにも心のうれわしくなし
かくしんをば侍る心えの事にて申

侍らは心得さきにさまし申ぬまいは詞にも
きこえさせ申に心得る詞侍る論する
あまたいひて又心はなくしも申すへき
所論心と詞とは侍るにてこそんなをも申
申ぬる心詞の二つたにおのれの侍るの
ことなるへきそこそころに侍る但心
詞の二つはこれまてこそいへと侍りとも
うちそこんまても詞の侍るによりて
侍るめかやうに申侍るとも又詞に
侍るの姿と侍る定申へきやうに

歌の中道ハ只ありのまゝに心へきにくゝ道
侍るを人のこれをしらすしてやすらかなる人から須
歌しにさ侍る歌詠の時もらく也後悔
いさゝか歌なかをさこれのありてやかて秘哥
ゆへそのほめ歌歌道にうしなへるにや
後損ハ之ていくはゆるけさの絶正とや
ぬりもその意しにやうてくうけ侍る侍る
雑意難及そえ侍るなかをミこれハあるからは
大事とかかけるすしいかれともことに此道ハ
さりと其侍の心の中ハ歌に歌の苦しみを
うしなへく及ハよふもなき哥ハことの外に
むかしよりかくのことくなる人も出来るに
いふ也作ぬそ作る節ハよくしたるき
事を何やさ有とも先指の庭訓にも今一
うしなひ侍る先哥の歌道の根とや書は
ぬるハ万持ぬをとゝくものはこゝろさぬ
歌乃十躰の中にいれれの躰をもみて後
ゆへりも又其のほめなきありてきめるや
こゝて錦きうかしく心あゆく衣冠そし
きくゆへ及れ心ちとるゆくゆゑ人しさよ

人の歌道難しと心えて侍るは学文ある人
みさへくともみゝんにきくれさけのある紙
のことなしにいゝ侍るうれは古今の事にくは
しかれ人は歌道とくらしくは何事も
よろしくあそくろう侍る流れ事探り衆情なる
かなはる中にもしころくめてあつる風情
にくいゝるて小くうこかくうなやもとくと
よろしいとそなる中にはつまく歌道は何
ゑへしるの前はたれ心すへたくさよ詞の
わきのよくあまわるやうみてなめけさる流

こともなくに流ゝせかゝ紀への出つるもやう
よ関ゆるやうにく遠きくらそすなる康経
たちうしく両への文をたて多く流ゝやうとぞ
てさるからる詞をそ語りぬる小なる侍るや
さわれはもさとよもしともへつる流
けいこそゑにも入ゑて志さしてもたえてさえて
事のよ文右の前にもとの前にもよりに
いゝいおろかそれのやうときこゆる事の
侍るあまさたにゆる事いゝみて初心の
ほとなるへし上手のみつきこえきて忙

詞はいたしさすらはちあさくこゝろ候
たとへはめくしもしこれも達のてにをは
かくのごとしされはいやましこふて
まなびとえぬ趣にも未練の人の上ある
いはれすなはち句に付すこしもなき事に候
付る大かたすこしうけれぬ趣は集るゝて
集るも其まゝなれともかくしみてとせる
いはくにおほくなへしいてをむかへのく
そへしるんよめる集るを捨て風若くみ
さめすすゝみとかくゆる人へし又ちとあるや

やうは佛さふも其ほか作しなのごとくさるや
みそ花まよる人風はやみて風そてよまぬすい
達者のいさしなるへし春の句たい秋冬
なとによる人云の句を作雑や雪乃
句なとわたる其ての句のはこれるを
関ゆるやうにまも人なみさへきこみてし知句乃
詞はあまりてまさ多くこゝろ事いあるまじき
事にてよろの中小論とわはゆる詞は二
そのまいうすもぬとの句は上下句まくての
ちなくへあはやをき人は文言の意をみいてそよ

ものゝ上を見まはしつゝ人の様子をも
ごとくなる句也ともいまだのべてかよの躰
也とても一詞をもつらゝ句ゝ上句下句にも付て
其の句ゝかしけん雑や季やをもゝ定め
心得べき事也よく句はるゝて夕ゝの詞を
もゝえ入つゝよめる類は仕立やくゝねの
なきかふやんこ所をつへし見る事あしくて
吟しそめ侍しく給ひいつはゆる詞のさを
ごとくゆゝくゆかるに文法を過ぎこそ其の
句をよめる事とて侍しんは物の給ふ也

なれはよろしくさせ給ふ心得べくやくへしき事ある
又題をとるに事一字題は心得やすく発句も
下句にもあるまじきなく一二字二字も句の境
は題の字を中しの句よりもあるべく題の
結題は一首にも事にも其の事まで候を
かやうに文かしらにもいさゝきてあるも句を定て
や題にはまくも叙述とりもの中小さやうの
ためし何もくもう句にはかくたへしきことあるらし
かまへぬあるましき事小成に但又
よくいできたる句をみてすくてもその字

なとて髭の字なとやうなる人ハ制のかきりにあらす
あしくもきこゆる字なときこえて侍る病の事ハ
平頭の病ハくるしからす候韻のやうに
かならす候ハまれなり平頭病もあるへし
まれなるへし口病ハ病なれハ人の入れ
られる事にてあるましく歌にハ皮[illegible]を
三代病よりの病ハなかれとの歌になるなれハ
何の病もいとハしくこそ見えてさふらふ
しかれハ歌の上にても病さへなくハ又いとハし
きそいふらん二首の歌も前の歌の上

十首まても同韻をよむ事ハ心あるへきにて
候かさハらしかれハ韻にハあまりてあるも
くるしからす候但し歌にもよるへきにハ
なきもの韻にて候とも二字三字にあまり
よみ入れハあさましき事にて候地形も韻を
こゝもとも人に同なき侍ましき事にあらせ
かりそめ也文字制し侍しよんけん文字ある
くれなくハ其風の字なとやうの韻をも
いとハしめし候てくるしうハなしこゝにて候ハ
うれしよかりしん歌のもとにかゝるハいくつも

おもふ讀経するもあらんなれとも宗の
ゑきを分ヲ見ればかならずおもふ讀経をも
まきらんかいとよかしゝては當時眼の
前なく此の秋なるやうの讀つきは上方
ねぎれもあらんて事いつくう寺の事もて
やうく寺々門前の前なく此の秋うと依
寺く出てして唯心と秋なる々しく春の門前
をとりそてはらはめれ方に心さらまし讀経き
かくてさりとは是とく新も自然に成給ふん
いかにも神妙なるべくはをすべく御の給ふあらんば

不足論を申こかましき事までは是そ寺也
ありうべき祈まではめ給ふへきいまだくてき
こゝにてや金人しるは先達志用や候し
十禅師人の気乃さき候みくさ依くへきもて
思量も思量なるねもうの事なる事柄なる人
し或ハ幽玄祈をうけるゝ人くて権現新
をよあそとおもへ又長高様をねさるこそから
濃祈をいしへい御のよくはへき只佛の説
たまつるあまくの法法も衆生の機にあらん
捨るまいやうねよすこしもそれすへからし候

就このむやうさまなる治めなれはとて此和歌を
よめと云侍ん人に教へん事こそ道の魔
障なるぬへくいかの人へかよめん事能も
見えうしめなぬ後の風和歌をなんよみて
御の和歌はまむかなかなそのをしき
事ハやからぬ心にかくへきまゝそれはそれにて
又さ一和之人にて大事和をすくなる事
之手なる所は此盤にして正信にみすへき
侍く大事の和歌はまむいくるうもし
たに正経をまうすれくねのかこまもしく

をけ之むへましくる哀て侍るとかは
かくなるまして侍るさ達者かこのなすへき
筆も多かこの類ならさまへかなて
あてかのしもやうなともさへゆのをなかなるす
天下の道なるてのかなる侍るへしけり
かまいるさそて勅撰をたく集なすへし
みなる姿なる天皇にもまつしへのあへく
棧櫛しては御この宜く侍るへし後撰和歌
清輔朝臣なとの庭訓おゆひこのうち
またなるさ持く称よおのもしくこなる

ていのまゝありかしめへきこまて此道を
なる人意をして一つにいう言は高雅なるに
まゝの世高よりゑ弁されは口のうき人をはね
しくことのはかりまし高雅の人はことに
まれとこてをさへ高よりんなしと也しく
あらくいふやうにてはあの道はうすらくは
言語よく兄ひとつらく善悪はさうもなると
つまこゝろ大切の事にて只人々よく相当
ゆゐの目にて何とみしはうの放は古を無
いそれ人の言をいふとも字しれ

もかめあらいくからしむしめ歌の祝儀
稜群の言なれとも綺る歌ぞ人々にはうも
深くうたひ得あは只うしよりて言
此善悪は此の人のことはめる識ましあさ
ましきことを見てゆるこれはひとく人に
並それまのやるゆ人なる意かて知らくい
寛平の御世の先達乃言にも善悪のわかしも
されん人の言の雌雄なとを用かくさ
はへきかくたまるよしまは得是にそ
愚老も此やく弁ゆるすはゆるさて

こうとなりし代に多年下すんかゝり侍ることよそ
れ程しつる去元久比住吉奉納の時妙月
あきらかならずかい昊喜多に盛し侍りしに
よつて家風をうけつかん為に明月記をば書
並へく侍るなりも力になるも此口伝とそう
ふ存するかやうの名に詩すきくへ侍ること
やとかゝらいとくろうに定侍る文左詩の詞を
どうらくしもあれ言をいましめ侍るなり
いとあさくもやたちてもいとくすくちぐさ
次の詞さ[illegible]このもみて何しまきとん也

一あるはあるのかやうにや侍らん常に白氏文集を
一第二帙の中小大要の所侍らいかにも折々披見し
むことをうや並侍ゝ詩は心なけれどもまた
抱そひむなしいまして何にも高人の幽旅あるは
心中をといううえ吟させるの合席あらん
高吟もよくしあすまた先口なるにすまえて
の一のあらしえて侍るや吾心をよはかりなし
こゝにいえうして詩にくもの文字かくしを
心をきくうれ合力にてあるん侍るへし
初心のほとはあかゝららへあふやうにきかく

さやうに哥は案すへき事にもあらん
心しく聞ゆなく案し人の性もかはり進て
退く心のいてき、小にはすむさとめれは
大やうかに案し、為よめとて文字もいさゝかん
はしみれかまてき会席の所をあまりて
哥ねおほくしも事、それ拍けいこは
初心も用させなる事にては百首なとみ
讀ちよは初心は四五首に過は七八首よ
きかよきに〳〵し初心のほとはしらす
哥数帯てたやくはよろしくも多く在

詠なし候ては詠すくたかむ哥なは
在志なく人に見するゝとゆめ〳〵あるへから
候はゝ哥も未練のほと成とは詠なしいる
哉ふかく詠すへきよしは事ふ為ぬは流
尾につきて哉のそや後くこなと流されか記
いつの哥もよろしくきとて稽古わく哉
なさはちとよろしき様なれく後とかと覚て
む何みよろし哉くは難意なる紙てけ
を申消一為ぬは哥は哥紙にかゝまへく
みましく為て詠なくへくは或は立なる

あそはして文らんたまふは自堂
たくしよ人は字おほれは晴のいふ紀清式た
かしこるやうにくはしくよまれぬ事
にて御すもくせえなりては許なき
事とて御ろんしよろはのまさいそう
志さまのうるりしきつれまてよろしこと
るゆくはあかしさまふも庭たらしゝや
存そしてぬもしくかし須ごいつもしめとは
しよく文字のあしはよくも悟て後よ
あくへきとみてあれは祝ほつも字へしとみ

ゑみ字はいは法よは字よんしある相海の
附こ乃御法のおほ来て隠れは御の心文字よ
相自の字かしよめくるもじ人とふ霧し御
此書ゑみ字は後よの書く程よ道の
やうよんごとて御しのは満屋之一如ある
きてえてるもの下は字かくるこめきさてゐる
人しかいまふにて のよ勤とせは御くを組て
驚錦きいはわかうるはしむことあさは
しきさまてよこ結はなる庭はくて総割と
のこまりるこゝろのおほしをかくし字あすく作

まことにこの道のこゝろもちなるへし依之條
相構〳〵和哥は大切也年来
稽古の道たゝ此条〻のほかは全く他の用心
なくして心底のはかりてかき給ふ
ものならは須此道の眼目とおもひめさるへし
御沙汰候へきことわりあるへしこ

建武四年五月十日以彼写本校合也

写之此庭訓者京極入道中納言入道
家並内府許之条〻之旨趣一〻甚
深也可秘〻

桑門凝然

文明九年三月五日以或秘本令書写之
和歌之秘伝当道之奥旨也雖為当
布之抄更不一処料令若年

持主源通秀

同十七年小春上九挑灯下一時終功了
彼本右中院一本通秀自筆也依或人
之尊言令書寫之者也
桑門宗瑅 在判

以件本令讀合訖一ゝ為尤秘本歟

たまのみむ世をふす
なゝめに流くきみし
あはれのねさ
すきこしかや
もし

以彼本令書写則遂挍合畢

八雲口傳 号詠歌一躰

歌を詠することハかならすしもさいかくに
よらす唯心よりおこれることゝ申たれとも
稽古なくてハ上手のおほえとりかたし
おのつから秀逸を詠いたしたれとも
後にひきやうの事しつれはさきの
高名もうせてくいあるへきなり
一 それきんちんにこえたらさるやうは
なるあはれものうくすなほなる
事もありなんこれそのすゑなる

なるへし はれハおもへきやう成様に
心ゆく事ハよろしかるへし
一 題の様の心得へき事
天象地儀植物すへて其体あるものをハ
その名をよむへし 此一字の中にも題の
字をかくしてよむ事ハおほくよむへきにや
但わりなくさくる事もあり
紅葉浮水　資守朝臣
筏さすまてくれなゐの水上ハいつのやまかせのあらしなるらん
月照水　経信朝臣
むすひてあかすのなきさに宿かりし萬川の月の かゝやく
此二首ハ其所々のさまをよくよあらはれ
たる題をいひかくされたるにてたくひなき
あつさまさまゆるりてみるへきなり
まへるなり
五月四日歌合鄭公
舟魚とかいへるけふ三九あるなかやめのむかし
此あいハ落題と難しそなり
詞のことあからぬるゝ題ハ心をめくらし
て詠するへしこゝにしたなる無の題

なとハさまくて侍るなり

隣朝遠絹恋

心ハいきやきちのつかきくつめて百夜もかけかつのきんとい

等思両人恋

いにしへ小松のね人も我おもひつ東ハ横にわたるつれなかさ

津の国の生田川の事もいふ方も限りやしさらん

隔日恋

三日月のよくをとて両郷のわたりのもくてゐるとりくる

秋といひき心のあさきさゆきてれたわかへいふし胸ふるさき

題の字をは必しも字

ある人まうしきはめてしは此題をは何の

字いろうきんまてあるへくしれと見きはめて

ある人のいふ此人の題まて字毎に

そ代まうしき物なりし難題ハ一字物

こいて物よ去るさまなり

池氷やよあ

池の氷いつか嵐の吹てもあわるはまさにはつきなるらん

此字難題なり

難題はいつやうにも新すよしてみえ

詠するのあわ風情のめくらさるらん

これは議論をもはらとして出来し出せし
但古集よりは枯の郭公なとよみたる冬の郭
公はなかるへきかいかやうのよりは聞なる
いさの詠しへ平によ字をもちゐてや
もくしあん題はしまつしやうあれは
しれんあるへし　假令知霜なとあるへし人を
題にかく知かしれんて詠し野虫を野の
虫のなく暁席はあつきの席夕何面は
夕立これ衣子なるをさ衣子島なと詠たん
いむ事あさきやうにいふへし　題の

はしめの字をあしたのなかにいくたいたん
まてやみて哥のくしめことわりとしたらむへき
あるへしこといはれなる術なしてあるへし
但難題はやうの事みてきこえるやうなる此
題は上るよれくいさるはしかし只一句上
詠ぬるよりはなれと堀川百首は一字つ
みてあれはさやうなん題の哥数もおほ
くよまむよはりしめのもみ字よりあては
もくるしかるまし　但かれて一首うちよりまん
哥はやうそてえしめのみ字よりたる人たん

たゞ気をつけてきこゆべし花の題に落花を
詠じ月の題に暁の月をよまむは各
ハいかにも次第中に信宿ならのことし題
にあるべき地の題にてもあさめて詠ずる
事論すし連哥の傳説のことし但これ
すこしは揃て意つけてそれハ一ちからに
きこゆべきにもあらじ春の題に秋の物
を詠るべく秋の題に春の物を詠ずよ
にるゝことはあるまじく候

露傳亭述樹

から錦秋のかゝるなどらかて春ハ霞の衣ぐ此森
此方ハ歌を詠せさせすゝむるかゝるを
去とれかいても秋ものあきは去つさとへ
ごれくやさるかやしりし此方ハ對御当
なしと申されと事すべし
春霞ついみくいつ雁かへるいそぐ帰るる秋霧の空
秋立鳴とみされようて田毎に落るらむと秋霧あ
なれ〳〵もあるへしとこれからて泉紙
題にて軒の下水とよむべしてあるは山家
此名を詠ずる題なり　春興　秋興

いはむもなほ云ふべき事いとおほく
さもしとしるべし朗詠の題よみてや
山居 山すみ山里ハすまゐ也 野鐘 寺の鐘 海路 舟の旅
野亭 野の家 水郷 水の里清き川 水辺 もしくはかくなし
ここに名誉ある題にはわざと異なり
なをりとめて歌をよむ人もよみ易きと
きこえたるかなしみ 秋興 鹿鳴草は
よまむことたのしむしきあらぬ
證する堂の波たつこと添ひすゐわ
うらまくのさへることともなきてなるも

後撰に
い名藤式は病は医者にあらずわたる哉
此方嫌ときこえて例とされは客式客去
こともよるべきゆる新をもしるべし
杜丹 ふかみ草 芙蓉 異名 菊 かやうに
いふこのよみかへは異名なくてはかなき事へ
からぬ方にも古のあまりは中国の
名文所のいひならはしてるやうなること
こそあるはおほなる古歌の題は
かやうの方をまなぶ心得べし

落葉ふむ事は関に侍る事を
よむへし　但落葉ふみて深く讀人に
ても耳にのこらん人もあるへからさ
なる事はよくよく分別ある
深川をわたる人のいふてはきゝとなるまてよの
はての説也
なとに関はこの浦紙かられ山てき風のあるまて
其外の當時の人名あるにはそて
うれ宗祇の意となりて詠しなし
義太なれとも儀なりしあつかひて

一　旅の字也　大かた落葉にて
よみ人よい詠ならさる事なりとの
たのしみせよかりのさき江はりとめて
結ともれは言てみるへし花さかね
山より花をさかせ紅葉をね江はなち
をかせんすれはいまその所にあそみて
歴詠しさもとなりて紅葉もあし読
旅よまりしく詠也とはらてゆる
いよいよはそはさあつかはくへき
なるを大淀の浦はといふ松の

住吉の松にて浪の字許されたまはれ
いにしへより千首すら能詠ずへし
なにの花の橋なとは首よりは多し
少しかはりとあるあるは水無川よりは多
あれらも三つるしと思へきるはやかは
さへとも今も絶つしき事にはあらて
首の事とかくまて一首も出たして
此讃へとんにやう三にいく必詠て
へきまつまし一首あるなれは独吟
一人の力にて撰集なとのやうなや

一 歌も初心より詠やうならへきならは
百首はよまむそれは此歌にて取にある
神ある物語いにしへまてあるさまなる様にて
三月に新勅撰などにも題もよく
案してへしきちのほくく事もさしあへ
かしこき歌のちく事もなし一の事あるまし
百首なとは必流思する事はさぬるか
三十首二十首にてなとは歌
ことによりて詠て此歌ましろへからしと
独吟の力よいかしては能く流ましく

歌合の歌はとしに失錯なき人の題
によくかなへん事なれハ能ゝ見るへし
其歌をあらまほしきやうなれハまきらはしきを
難すへし其体なれハ歌とも也
山桜咲初しより久堅の雲井に見ゆる滝の白糸
春ふかき浪の花かと人か見るらん卯花さける玉川の里
あきさりし野ちの萩に夜ふかき露やおもき
ゆきされハ衣のうへにさえまさる月やおもしろき
四季の歌ハかやうの事なる故論ゝへきや
一 恋の歌ハ天徳歌合に
色に出にけりわか恋ハものやおもふと人のとふまて
恨わひほさぬ袖たにあるものを恋にくちなん名こそおしけれ
是ハ[illegible]歌合也
[illegible]の歌ハ一段あはれなる
此歌ハ百首の内歌といへとも関白歌合に
いつれもよき歌のうへの[illegible]
ころなるへし判者かわかれこ
歌あしくともよく撰集に入らは
かやうの歌にもよろしくなるへし
一 本歌のとりやうの事 詞なとをかくいひ[illegible]

一きよけなるハ姿のよし紀なとハたゞ風情ばかりを
まなび侍る事あらハまことにさあるべき様
をあることも事なと難するなとは侍りし也
あるさん程をハ上句はよけれど下句を
よろしからでこそ上手とて人しも上下を
いひくだすことなれば聞よく侍ることなり
聞よき事ハ一字二字も耳にとゞめて
三十一字の内二字もとゞまりて一句の
よろしからんをさるもまじりても文
誤ある事なりとて

我のかなこゝろ鷹に嵐といふ事や年ハかはれど九重に立そふ
此哥みるにすこしもあやしうもなけれど
聞しるもとより尾をながめきゝはゆるまじく
またひとりかくといひて
冬野川きての山嵐吹まいて三ほの桜を散らしぬる
山々の若葉ときてもかよひて嵐を吹よせ
若葉のかほりも錦とて雪ふるとも
いはねよきこそと申をきこえ侍し
ころとも申さき種くすゞしのゆへ
言ひすてるまゝにかくるとてやゆるし

あまりて京へ白ゆく舟とはいかゞ
里に萬めでしたるもやまれ嵐の風の音にかはし宿
白くるれば逢人のあり二千載集の吾と歌に出て
老くは後撰頭上の言上て詠ぶやさしくて
すゞしくゆかしきこゆる也すゞし
言ふとても後拾遺には入らぬめれ
又二千載の後には心ばへ作るや
何舟のゆはやしほ一縄を挽く舟ぞのまぬれ つなるれ
此舟は志すさき方言ひからめれ
かやうの事を云は近代の詠

よ入る春かて
並べて花の木のもと成ゆきて岸につゞる白雲
みやこにもかくみえし桜の花の雪散る春の暗
まれけるかなの世の草むらなりて深く雲々雲を
朝たちくまなき入江の波流れ庵花浪よせる松の夕つれ
かはくき雲のかゝりて松の葉の葉には雲の色 流るゝ
志賀の浦や遠さかりゆく波よりも氷てある月
うかあきる人なき初をの山風よいきをかれとい いつぬるる
立かりとみよきてらし松浦やまちぬ花浪よあれ ともなひ
春中よそこうなる人しらひ入山のすくりまとてぞ なれる

はかなきうき世をなくなく過ぐしに猶きく一は梳の音
ちかはらくなとの山かきとん昔の
事は何代ありそていまのことはかる
ましとこやの大つきの乃あやさ偏にまこと
みさる事あれとよくよめる事とも
は寛平は法のみかとなしことしからはちぎ
代よりたえしことしからや基俊俊頼俊成
なといへるきこすくれたるこのみちをきはめて
よしやめてたるの人々しろしとの御
は侍れ我らのことうはさこれのかへもさ

ころ此の歌かりて詞たゝさまよきつゝく
させる事なきはものならぬ和歌はなかめて
聞よときこ歌は出つめくときこゆるよし
ト定て侍めりと歌は詠いて高みあること
も からを見むといふて古き歌は詠くしみる
なくいふも事から字ぬ字あの御まて
あきらかときこゆるとよきこれや屏
らいくきゝこる字ともやすくこなれめこ
き中のそらにはよきにすてゝあるこ
なくて侍らんもしきてるいはまことき かは

されは難しからぬうき風大にやすらかと
読さるよし先達申さるめり心のめてし
きほはかまへ出きぬるまゝゆめ／＼しき事
案しわつらひそれとかやうまて深なるは
事をはなくる事かなはすなき也
これ故平ハこころくたるかややうらん
いにそうろふそへく讀さるもうろて
ちてこのたんとてあまりたくあるも
しるしをてあるきに可よの常よ
みくれかをかくくの様さにそれに

このすまくさうよけまてと案しいくし
可はしまするたつまれ流思えてる所
えていくしよくれはたく又後よし見ゆるを
まてう見ゆる心乃すまゐしもうれ持すへ
は、夕詞のうまあはゝるゐよしこい見し
みるきゝ言の泉ゐたてる九品十躰
よみとらる事なるま

上品

春たつといふ斗にやみよしのゝ山もかすみてけさは見ゆらん
ほのほのと明石の浦の朝霧に島かくれ行舟をしそ思ふ

すくもくれなる方ハおりしろき
にはなきにうつりとやいはん

中品

春きぬと人ハいへとも鶯のなかぬかきりハあらしとそ思ふ
もくれなる心なり入なくとなる一首ハ
てあるへきことさま此歌其体にて此方乃
ありそてあるとしやめる

下品

世中はうきものにて無けに様けにはしきよに
ありそてやはらて古今集の中乃

花の陰やすめるうこしとたる人あり
猿丸のいにしへより人むかし年へたるかも
出て出ては初雁のやうなる人のよみや
是下品とききて侍りけれはいつ海
わするてきこ方ハよろしきて後
枝葉乃何ゆへしきおきて後これハ
させかすなきこ方ありつめたる
ともなけれとも能とみれはよき
方はわかれさめきぬやうくもへし
ゆうくと縁なるしたへきこ方かくも

のほいくまいらしとすれいあそこ
らくもいちいわくてろわまなれすゑ
すむしゆけきやうなるい面白き
能すときゝこゆるなかにも一と乗すく
らくいしさそれと心すての?それい松保み
事ともそのうちを関すて??るもみこ
なりと首乃すい一首也中さも露の
あるやうを読なしくおいりきみ
こしきこゆるなり
其の意とき??の所泉河いなかれさまきて

よしの河岩浪たかくゆく水のはやくそ人を恋ひそめて
近代すいをてひさそよしむなわ但家
無なとの中いふてける事ともあるへ
うきいにいのさまふかくも二句乃中ふ
その事なきさこゆへきなり
一 すくいよせあるかもききなり恋いらうき
橘まいなりいあゆかやうの事乃あ間へきなり
そのくろくるききすてまうしかくいふ人の
もれらきてるかよききしなりあかうらふ
をとめあれめて給はてむといるい

まるやきなやたとへいひとめてなるかなをひくなすと
これ縁つゝるハ露ちこすてみくゆへき
なるよきおもあやしよからやうこ
ミてふへし

一 ものあまることもゆよそるくあまりて
まやすくなるへからん縁ミやさとたく文て
あまりて事ハまへやいのふもあまりせる
かるてまくあまりやゝるきてかくる
ぬれいく字まくゆかへして
年ふれハ数いたのミのハあれにかをすれ袖ぬる

おもくてなるの月の月影もみちやれたてて山
此哥ハそれいはれさくはなるかな
しれ字あまりたるよりてかくなる
為きてハあるハ源ミすやうので作
有るゆへ関小くきたるを

一 まるの事 詩るへんときねるゆるくるこ
ぶう源
まうてつまてあまてへて三ふぬ白菊咲てぬ我かいくよ
あさ戦の山なやまみすまてる山まみ筆をさわるれハ
いつかおのやいつはの流ゆいつみ宮立てきへまして一め

かくてまたやはらかきみの詞は字はしめあらゆる
ことわりはあしかやらねどもうたに詞をつけ之詞を節と
このことはをこえんむすはあるへからす候ゆゑも
よみきゝてるかのよきをわすくへし
はれもわするゝやうなる事は申すまし
あまそれ人の心もよくきこゆる
よきいふれもまことなき事と
一寸の詞の事いつものよき歌にあるへしほと
の事はやらぬるへし但しわすれ候よ
らん詞にてつめてしるしあらはし候

あるへきはあらはし候上手の中にはある
いと筆にはのりて又左様にあれかなとて
といへともさためてよきは詞の外に候へん
もねこしいそもへしかくて候也
かやうの詞あるには候由申事に可候
きこゆるはあるへき事也此の人の見
わするゝには筆にはかくもしへからす候
かもめのゐる　うきねもする　花の宿かせ
あしたそかへらし　霞はわかるゝ　月はあかさる
もみちの枝に　花の露かな　花のちりちる

雪の下ゐる　さわてなひく　白妙へかゝりて
白妙へ御息　浪こえ行て
涼しくなりゐる　あやめそゆる　夜の中よくれし
きそ片すき　かゝもねむ　ぬれてやはなわ
ぬるれ浪よる　かれすて霜の　露のうこぼる
月さう流る　月やまれ　冬なる夜立
春立のゆる　かくれふける
雪のうなくれ　かくぬなをこほりていける
月のかけて　本かゝの風　嵐よりもるか
庵よりくれし

一
雲みる家は　やきてゝ事く　乃紙おもみせ
手てさへ浪の　かゝる袖の　袖おとけるぬ
春てあるかみは　袖つけるぬ　秋のこちりて
むはてのみなと　ゆるの雲は
去る雲の白雲　月も桜の　浪よあまれ
かやうの詞は　ゆかしくある事なれは縁す
是からの次古きなれと　人のこゝろや縁而て
そのゆともちなるはいこうすてやめわ
桜ちる本みて見のおかなまれやうなるかゝ
ものうなれはよそこかうひゝするる

忍ふといひましめられそまたはつらきをも
此哥よりかき方へから深く一首ふくみある也
ことばはさ程くはしくもなくへつらひて
足引の山郭公もほとゝぎすのみちゆき〳〵心乱し
称のことはいくらにもくりかへしまし
それをのかかしてさんとはまたあるべし
させる詞ならでなきことなり
一 たとへはところ事 五句にも三句にもよむ
あるはかくしかもやめてこそ 但それてやうに
よく〳〵したとへはところもかし

むすふ手の石まをせはみ奥山の岩かき清水あかすもあるかな
すまするにいゝる山家にありてもよろしきなる
清めたもくれぬは家中の力もあまれる心なり
心はあれは神と書いてもいかやうにもなるへき
此哥はいかなるすかたなるにや
なかのたにのきてはすきつりてよめるにや
心はしほくよめるなり
足曳の山桜戸はあけおきて我待君は誰かとゞむる
名にたつる嵐の山の雪ふる山桜のゆかり
あらそふ心中いかなるしなめる後の世まで
さらんと

ちるさくらの花かくすらむ白雲の雲をそこなとの事を云の山をも
風あらは峯にわかるゝ白雲を雲と見まかふさき君か心を
咲きて花もをのこ侍らは白雲の様にて侍らぬさき花の白雲
此句の様の事は一かたの人には恋の歌を
春の歌にとゝのへてめてたくしき
ゆふくれからの事なるも
常にたゝ歌によむにそ侍れはよろしきなる
いにしへより今の世にもゆるしかたき　但
今も更にてよまれきかさるはなし
是とおもはゝ心をもて心のよし侍るや

されて伊勢物語の事続きてつくすまてを
めてたしとや称しられきものゝてうあはし
万葉の三代集の人の可あるへき万葉集の詞をその
中まては侍らてはやめるへき事のなしや。は
もうちくはよき詞よろしき詞の事まて
古今集まて歌や侍らんさるへきそれ
めてたしき風情きこゆ三代集は
人の心も世の中ののりを学しててき
見る様侍りしくなしてるあるへき
あはれくやあるとうかしこき人いふ

たゝうたの事のあん趣をあらはしく
学ひ出しそめしさハすく座ハまさと
なむや わはし〳〵か すゝみ名をとわ
上手の関をあらんと思ふて初ての学
左いふとてましきかるといくそすいは稽
しもえしてこのころしあるわざ人のためて
ゆりしかる我芸の手くだハ我身ハ稽
貫之の小まちさきつてはしたしく
学しなぬよきめでしき事なくこゝろすく
後且する事ともなけれハまうしとの哉言ハ

おまへしかくてけるほとに人の心あれたん
まゝたさゝのあらそうるを見ききつけたまふれ
いふれく我手ハ上きさ人の能学して、天
あれ声といふ人あそびよる道て無一画のすわ
老後よいふるすても能く体しむく
あしきにすなはちのうきもしくさわ
云ハ夕我めしく学していし云
我ものことつ侍しこやそとのまかて
しかうん事ぞあるものそれハおも
ねるをすみれいとも誰の体きさきまりやう

なと次つしくきてなとなくし　御紙之
からつ印

弘長之比依先人之庭訓為後学遺
跡不顧老眼之不堪雨中記之為家
しかる紙家嫡々て被　融覚判

此書は紀の為しやうるかたより下た
しくたかそこしれうしわつくきする
そうることはしる人ともそして人へ心あれい
いそこいとい由あ人中に紙あるなからすさらる人

こたかきそこれいそもうなもなくてうそなる事
そかいきにてはやうゆめく人は
えそられもてぬまてもつれこれ
やまとうたのさ紙えする人してたの
世の人たきめきさまくかきこそきこゆる
ありとも家のすてあるへい人とさらよ
事ねかはくはいまにあるまとあなたは
この歌まていはくをつめさ中へしもそ
おかしらすつる人の歌ありのねさまとは
久里の月をもつ中の山むかこみちらむえ

なと欠つくしくきてなまくこし　御紙之
からつる作

弘長之比依先人之庭訓為後学遺
誡不顧老眼之不堪雨中記之而家
こ和為他家努々不披　融覚判

此可子記ハ人の云しもやうなしとた
いしくかきもしれぬてわつらくせさる
さるゝ人ハ人とも思ハてへぬるさい
はそれといふへし以有るからさうて人
にかをよれハもえるなくてうるなる事
をかきたにてはかなとゆめく人は
ゑからられきてぬきてもうあこゝれ
やまとうたの道を猶える人にすゑ乃
世の人乃そめときまくかきそこる
ぬるゝ家のうてあるし人よき
事おほくいま作るまなからは
こゝの系まていたくをはしめすへしこそ
おかしくすへる人なるハ有のねさきは
久堅の月有る里の山むかこのみちらむ人

玉此ゆめるをやうの詞はれわの方枕
いも定まらず事なりてゆめわらを
みるきにおこなはれくゆ諸人さし
くしたれんたにゆうしるんと関ゆる
人のあるやそまはこまみさこあらん
しとみ花はきさる心ちといけふの
心に出られんかうる也なりて今さる。
題は、おほしえてならん初学の人さ
やて清輔卿のかきおかれてある事
もあれよましまいまた題傳の心は

よく心うへしことをそれは文字のみつをと
あるにみなよ見ゆてかるといひはとか
なきにするなるかしもなつかある
いと久く階しえてんきしある人家の説
といふ題よそ出せとあかさほとさけは
初花いとみえくする心なふしもして
うきほしんいさ見よるやうん口まかせ
ぬまん心ちこりすれともみくんめる
いとたしこてんきうねさやうまりて
又よるを題のりしいはいてさくまふぬ

事もなくやはらかに立るもすへし歌のさま
歌の理はあらはにしておもひきる所有
これは上手のよみにはよまれんといへは
過不及なくといふ事は京極中納言定家
卿とはかり
色かはるみの中山秋越て又とほさかるあふ坂の関
かやうなるをはしくよまれてはのちの所あるへし
あまりてあはさる心ろく所きこえやうに
てよまれし也　定家は又自らも後成
卿の歌縁語変あるといひつゝは

花やさかりなりけるに使めて百年に人たらぬ
なとよまれて人のつくもかみの歌をとらす
かのうて百年にたらぬ人とらるやる
人九十九歳いきたりけるにてわれはかなき
をきくるまゝ歌ともあるれはにやしそて
あらぬ事なとをきこゆる人なきにしもて
志賀寺上人はなりにて又深草ことやきれる
あしくいはれすといへるも又
津の国の生田の川に名をしぬる事を限らやとひ
やまとものかたりにある事又かくつく

さ有すまじくもかゝやう題の心地あるき
みなめでたく思ひつゝくりまはさるゝことに
ことは承りかきたくもなくさあら須頃の詩
あのうへ月然とすとも題楊貴妃の事は
てみなていのごとくにて代々やさる物さしも
ごいそられてやさき事わりろくいろ也
上手なりとていゝぞてもごいかんと云へば
又云ふ此事すべてつめの文字より尽せよ
よろしくさるへ事かくまゝ及びとて子細へ
ころをけしてハ云ふむつかしくて此句は

う事始なりしかば下地さての句をよく思
さてこそめで後半二句よりあそびてはえぬ
の又りし独かりとするゝみかまに一やうにまく
なりしはるこも人しいてそこしか云ふかくわ
さていかよもしほとたく未よくなりたるみ
んたその月心をかほしく又なり云ふことは
やうこゝろ上手に及ことみせらめてよしみな
へ其のやうも云ふ題つかきこそあれく於ゝ
こまかなくやんさあの通文なり云ふことい
句乃なき而もたかりに○こそわりぬ事ハ

にきなくしてことさらにきこゆるはあらじ
後撰にて女としては前よりの人の歌續後撰に
入てはべらん
　さけば散花のうき世とおもふにも猶うとまれぬ山桜かな
源氏の云く
神あるも露の命とおもふにも猶うとましき山と
句としかいつめなくうてよ上の句もしといかむ
なくつゞきとも打すぐる閑てはやまず
ごとも打まとしてくはこそ元へのやうな
すきかきこ作る人への事をこ数かな
ゑへきなとそていぬさうと覚え事ある
を御つくしをいて絶えなき花の詠はけ也
萬葉集三代集なとにあるきゝへ(た)ゑ
それといとくものゝ葉にてよは(な)
ねのこすとゝこみえよむすゑさるへき
とうけ給わしたのかゆるうちのは
所のまゝる詠しもしみれいてへこと
いてともへて代のまゝやうのすゑむ
こうかすみまいしのかきてかけるやさしき
いとえるかけぬ時うけつまへてぬれ

人のことの葉もかゝるおもむきなれはみるごとに
くるしからん事は人丸赤人ごとき作り
いきほひあるにやまことしき
やうなる歌おほかりしを又枕草子新古今の
はやりつきし世の儀者ともの言のみ衛句
ごとくなるさまの詞あらはれ又そのことのみて
ふるうしとみくるしくもあられ人のこゝろ
も高尚にあらはゆくへきかなしきは
もとしき今の世の女房のことく歌は
あはれさよりまされてくしも後撰ての始めて

いく秋くさの露のむすほれしを見とかくる
をみつけてをのかやうのときにはれ
いひ染いかるきさいてもあへしはしなる
かたのきいつもこそまして思ひしくは
言はて心あるしく春の夜のこと
をやはらくこゝろを思ひあそひこてはは
しはくらにもあつかまへて人のうへを思
うききよりしと葉のこゝろはくこそいらけれ
思ひ新なくてまへもあるてとかすは
かきあはぬ事のみにはかれはかくみせん

まや又うたがふゆくすゑにあるやうにして方丸
もとこゝもみなかなはず佛くたるいづれの
方より今のいのちなきゆゑは生ぬとあるよ比
しかとやてくるもなき比ちのき世の人
うすくもしらぬの方よりもの所の事なかしぬ
なまりやからん又いふしての方にもや所く
いつる者にはあまかくなりし成
やかましき心にも思ふいまの世にも
上るごとはゆる人それこのことしんあられ
めされもしいまかけるべきつとまあるを

佛の御らは所くら寄経のうちにも所こゝ
ひとくをきこしめさるゝにもあるまじ
念仏の行者発心して可能之者知識
あるひとものかなしきものにはまことにくれ
御の尊き人をたのもしくさとりまよひあね
こゝろの尊き人それ智教世上にてもやすく
云はれ尊き人が万学をもちても往生あるまじ
さうかし発心修行めても心へあるは
ものゝかな世のならひならまたなき事
菩提をもとめ給ふ人は信心あれ人へ

すさみける人の心くところ人に達者
みえたき歌の道をたすくることあるは
人々はしかしかはるかゆるまいるは
まきもし人そこふあれくたをこかは
さきうしてものあつれば世を作りの
心なくもましてけるのちや千の葉の蔭る
なを露しられ名かゝるあつ子しなを
同子も心まてうてめて歌あきしをたら
身まて作てて心なれまて一つきいてろ也
又四季の詞といふ事ありさるよし

それあれのまてみなけれや作くいふを歌
もしへし立の歌には兄こうろしことは
ほかれとまさも今まて作枕のかは
海はあれと山のは名しろてはききよ人の
開いてさてわりしのさらなる名世しを
いへんとていつのけきよろくいろし事
四季の歌にしもろくへしこのされしき
又四季の歌作らし事もやうしよくへし
為人そう作る乃色みさぬ歌る老此柳の
あるともの月なれはりしめてたゆの月ご

みゆるくだりを罪とある恋なと云
ゆくさきよきいひ出し事とも云は成や
有の前にとにさかりゆる事あれは今
平ら次而てはなきこと成ましく平ら次
いつもよく心しらくへきよや又恋て
ともに句をゆくある而とつゐましく事
此句のこと前あれこ句の事なすると
なきはよし事あれは而言なさといふ也
句をはなしとせやこしき頭次のこゝやた
三荻の文ことも名よかやる所ぞ読

なきとくき月前恋 前月恋といふ句
をも人ゑかりてそそておかうしき旅は
むしり会すや月とりしまてはて
月をいふつゝをかけれはよせるまて
あるへしうはのそむるかこ子て立て
そゐ心かよつへらゝやうなる後を
みとりへきゝや月のまへかそいはむ
のひるやうなるへききつまや
恋つさみしきつきゝうも濡かれ月もゆつらせ
こゝいふ句も後ゆて月前恋といふ句をそ

よまれたるにや又うたのかすにかきのせて
かつまたといふりをこれ人のうたにも
はのこのみえもむねをむねとうれしきす
けみかすきすなくては此のましまき
きこところゆさなくしそうたみ年たに
まは古今のうたえらひはて千載まても
同し三代集いはれもしりおろ事あれは
後撰はいやはきうたにはくみえわかれて
きうたもはくまつまかなるは此の
もん心く色かりうるん拾遺の奇は

又拾遺抄よりきこえかはいはれてしかれ
後拾遺又序ありてぬはゆく後にいる比
なれはわりなきこともぬはあまたの撰
拾遺といふ一抄とそこきいふ色は侍るを
いふかはりあそさはくるをわするれ
ろやしん金葉詞花なとは此のすくれ
かわくひとをしもしきこえあるうたを
ねらくあいつめきこる事からしことや
すれなき後の集より撰者の心みえて
さなくまてかくく千載や新古今

むかしみ世のやうしきすゝみて立帰りて
わかいわらぬへきこ葉の露とみて治
なむしてする色々のうへのあはれかきしや
へ歌をあまりまたなれともちて識
さ俊ゑあしさ悔く思ひ出して新勅
撰は摂政ふ于殿あわてまさしあれ
ことはえうれさまうつくしけれは
そのゝち続後撰立かへそはこゑを
御代はあいくさる年のはき
わきそへつめさてまやきぬつまさや

内大臣の子とねごてかなよみちとそはくする
人家の風吹そめて人たゝしく君を
たをあはあつさ可はえさきる撰集
かはさもの人前をかへんりは定
よる続若わすれなもうらいぬへ
あはきる人はましてうみちの事をそ
いとゆらん心と及ましきかれはさこめ
ましいまこみ代くの集をもみ続古も
世間しあのかゝもそひさうにやかし
かへらんはあやしくめでたくてめでたきの

はなみてくこ髭の心ぬしゆかしかりて嘆くと
みくはしくらしもしいとは夕ぬのあらし
菊河の人ての方ぬいゆめくまつりに
つむや事はましくは文ころまあつあくと
河りかかりさえんいはる方ぬせしと
なりの扇ついくすす方は何あこまてて
いまはしれそきこしはさまよく仍守
はぬまはなかのあをしかすすてては
小式部内侍定頼中納言をひきとめて
まうしあみすみんとあまみやうそてや

もくろらや周防内侍忠家大納言とのし
なくたん名こそ惜しけれとやかいなわ
心ささかとへそく人のいろそまぬね
方乃みちとしほかれぬる位のあらはて
まそくむしていさやみさせむしへて
しいかは侍従のくらまとかまそては
侍るやうまく人とそまはりなとのくら
いらあしはよ事しますいさし様
申しおほしき侍るの世の人しうしやゆ
しくしろく

此一帖若安嘉門院四條（号阿仏房）口
傳也即以彼自筆本令書寫
畢尤可秘ゝ

以三條殿御所御本不違一字遂書寫
校合

近来風躰

哥連歌乃事ハ只四五十年に若干かはりたら
中ゝ侍りし比年代みえてふるめかしく侍
ハつまりをまことに天性紙そゝる事なし
替もたゝ侍るをまさきすい
為年代ある家よりまてその人ゆゑ
侍ふや祿家みすいはすゝしうたしく侍る
ゝきて侍れこそ、亘儀の冥加とや
四代の勅撰にも家数に入てまことにくく
侍らんは此度の集をも中ゆほし為

和哥をよみてまつる事も久しの紀かはらを
和漢ともに作られ侍りき又ある人肩門
ことなる事なるを貞和乃比を毎月三
度此月次百首を会を為定大納言此題又
判をまて侍りし其時の云家は嘉名巻の名
みてあつまりし也家此ありは為忠為秀云家
よりて侍りし為明ては何しもまつり侍りける
頓阿慶雲兼好宗家をとて取なきやしける
歌義道英るとは又句論之門真寂慧入道
頓阿なともよまれ侍りしも此は頓阿の道二人

ゆゑく上手にいられしや頓阿はかくまで
幽玄にみえたることとくよくなくて
其かよきことみ一かとめつらしく首尾の
歳をあわしまや慈運は定家紙ぬて
おさへくちてた神をかつりて心をを
らきさく平にそれやうくて侍るや為定大納言
こしのかりく慈運はかめられさる兼ねは
此中まちてたとえて為やうく人を存せし
やしんかきても人の口にあるふうこにわろく
侍るかつて鄙にかくれ其の雁のは一首も

此も業にかゆやうきこちと俳諧の秘を
うよみしうれいいく〱の事ともなりけるにや
道莫ニテも為定卿かめやされきしとくこ
しく侍しや同集法師寺なと言よる名人
為ニ名の所何も冷泉為秀とありし山
名誉し侍しよや此外祖月定人会う詞と
いすのごとの事ハ孫よ相含侍之家也
人しのすハ人にハごく〱ときこえある体
されども其の人々口之ぬきさしかく々の事もや
こ此也人〱侍しハ為定大納言ハ指て定

か〱ゆる〱とさ言ふあひて夫てて又かと
くとあるまともなる事しきるうや
とうとも此般ろ実あ侍式なる名やいつの名々ほ人
此方ハ数業も那及よしかめやうき化天下
倫瑰となりけるしと見也為明てハ生得よ而
白きやうよいなりけるしかくともまことの体よ
人とそれやうなる言体よみ侍しなるを
みをさて卿なれハ基ありやうよ給き
元しきや和歌の浦のていうきよのこと外に
わろくしとハ和歌の道なしてこ元弘の乱

可よみ人の望あつて名誉をもとれ
得たきは忠卿天性の堪能とは定て御
さうらはゞ晴の事なりとはよまれ候か
左右なくよむ事なり此人左今なとは三れ
申さぬ讀らぬきはき識たみ人よろ
定て候し為恭こそれは當前の風体一流
源氏文西の様に得たる事は後撰の
事にちそみてあれ近比の風体は
下るなるよきおやおや左御ねさひ
きこし調をいはしなくさを両ふ

一　よまれしなりともされはとて天性骨の人は
やすくよむやうなる事なれは得かたし
只一向に後の事をのみ心にかけたるは
命なるとも学なとして事は凡又為世卿
おりふしく得かたき為定は近比の堪能也
若きまて風骨天性面白き事ともみえて
得しなる事頓阿の歌連は異風なるやうよ
只得しかくもよきよき事は又かめよき
玄清鴻事今よまるし初心のわかのみなし浪
偏執の為遺為なさましくよみさきよき

ことのきこゆる事と為定卿まうして執筆させら
れしかはつたふる口伝有実に侍らんせは
の骨のあることなりて詞ゆたかなる花を
面白うかなしなる事近世まて略宗匠に
なめ侍らへハ言及ひ難愚さゝに叶ひ侍り
門に家武家ゆりて誉ゆゆき柳さへみ此
申侍れ若輩かゝる事に心いれて侍るに
先々にもよく書付侍るなる事にしるへき
ゆへ易くれく給ひさせるへしと存
一 高代風体事此人てもさかしけれは心深く

有しくすくみていふきこ人の詠せぬ
風情詠やうよくて作へ言葉はしうら
取侍りし
一 新しき事ふ侍しあたらしき心詠やする
ことをとくしてかくうたへく作
為しこゝろきこゝとくしくたれさるまて
不ゆ心よりやさしき
一 大方めてたき事はうたことかゝるへき
しよく我心中にてよく見て後よ左右様
見るへき事と

一百首の作者は父の卿の書よりの事は行めきて
くるしかるまじき歌とも多くまじれり
新勅撰作者也但古風を正しくすべきを
たてんとせし事也行めきたる家の
さしたることなき歌作とよく〳〵心得べし
申べき

一長高病なくかくあるまじき歌情の事と心得べし
一勅撰は續後撰民部卿入道是まで也それ
それは風雅集までをいふ事と申べき
一寳治乃民部卿入道也御百首は此本まで
作者〳〵書よう申べき
一新古今續後撰集は家の人の撰也
まぎらはしく思ふ者は撰者の人〳〵此集撰ぶと
いかであるべき作者〳〵
一為家の百首又保此為家の百首を定めて
作者〳〵なきやうにすべき
一何としても首の上の此事は今の此續後撰なりとも
よく作者〳〵して此頃の事は所なきやうにすべき
一為家卿申されしは常は用ひあれば正和
の頃假令黒雲の気高きを詠む様は澤字

なを〱のいふなるへき風情をするなり
よむなるまじき也但是ハいつれの御人
心中ニハ有ましき也都而なとハ作も
体思ひて有ましき心ある人ハいさゝか
一 為家卿ハ心みえてさへなる詞ハよろしかれ
あらハれたるやさしく愚方貞和家初乃百
首ハ為兼卿ハ其風体にみ侍しとも其の
集に多く貞和の方へ入られ侍しはとて
ちと其風にて侍しいひこゝにあらハれ
其一の四百首乃内初度からくゆるされき

無定家卿計也其後御百首ハ為定
大納言令記して続千載にかくしつ
無かくすき事なるへし
一 後光厳院殿為定卿の撰をおほせ被仰
事ハ愚方為尊円蓮院家の申され
て如此殊勝しめ給也御沙汰の伏見院撰ハ
捨られきいつのき何か其風に無事也
一 左相府よりも誰被の師にすへきと
尋られしほとゝく為遠卿ハ家の嫡々乃嫡なる
れハ為定大納言の大事御ゆるしにて

たゞよく取實にて取作んこ挙らさ
仍近此ハ一向あまへて御積られ給
へるとかや

一 本哥取る事 昔ハよまれしか 後鳥羽院
此ころほひよりは人々も本哥取ら
侍しやうのことなり 極てなりとも本哥取
上下の句を並ぶるハ常の事也 是取る事
をうつしとりて 風情取る あるひは
初をとりて本哥の詞ありてしらぬ思ひも
中ハよくはなれたるとも上一字取ることなく

ちる花の名残をしミし人の雲の雲に染る
又本哥の心を取りも ごとくにてあるへきやうは
ことなりとも本哥のことをさうりてゆく末のみ
うつし浪ごして一首取ることにて 末の浦や
ごとさのことゆく浪あらごとなる事も本哥
哥に贈答ある神あり 心ある人こそ
りやごとく本哥とりて 心あれは分たれ
思ふ心をよみたる 又本哥の心なりとも
かくやうにも本哥を返歌しむ神
あるまてゆきさせ あくまでもえての哥の秘

のこらず歌ごとにてたとへば桜の花のにほひ
にかよへるごとくまことに又詞はいかにも
みやびたる歌も常の事なるをは先年
此頃の問答は愚問賢注はまさりたる
し候やらん
一 源氏狭衣なとは歌よみは歌合なとにも読
置かれ候ども八代集は代々の御人
一 本歌には堀河院の百首は作者まで見
同じく名人の歌なれば見るべし 勅撰は後拾
遺まで見るべしと申き 但今は金葉
詞花千載新古今なとは見らるべく候[illegible]
御の事にかうべきぞ此は左相府へも
申侍しかども哥ばかり新古今まで
みるべく候 続哥は近代の歌積の歌
ども用るなり
一 被申候會哥読は二乃稽ある[illegible]
かく数寄する人は三昧に入ごとく心をは
めく幽玄にさかしく入く人のあるさぬ
不成事をしへし 又事かなはぬほとの哥
よみ人は哥先のよく成かくぬまできまく

すれはくハあまく人から領さる乃人ニ於の
くやきつまろしきうきまうニ死
当座の哥ハ先つまろくいふてよろしきさて
かさねくニ而ても無く候よし也 貫之ハ
立るの哥志候くつさけるもしよろし 和泉式部ハ
けるかまてしせめこハ一首ハ貴候に
哥きしつる秀逸をいわかぬ道のほわ
少く今をもぬるかくし
一 姿ことく多くよくハ風情のまつるもく
多しかく候花も風候ハ見も多候

称のしなきものいふ其志とさなる
きの見えにのしくからし候
一 哥ハ難すくかきことし此後成さるも
早而まきとまたいこし余くしけていふ
いわれたるよ
一 やすき二文字題なと候ハ披あるやうに
よんあるへし 野鳥の出そ乃の中にと
山乃霧候やまの霧ともいふ事多之
一 むすし題候ハまつてもよへしみハ本る
本候候而てよろしく

一　一首の題より[illegible]文字より四文字あるへし
[illegible]以上の字かましく
ぬるく聞ゆる事なる
一　題の文字をあしくいひて事ハ上の連の
ためにあらす初心の人ハことに近よるへし
もちろん也　高御覧さ
一　一首に傳題と申事ハ題のみえていらて
こゝめてちへうするとやうの也　又一首数
もしほしよの事をも傳題ともいふ也
三首五首の時ハ一首ハ一首にすくるへし　百首なとの

時は雲霞やうの物は其友なくるす
かくす
一　三十一字よりあまりて事ハ歌の[illegible]のかれ
あまりさるてハ歌の事也
一　寄月　月前　月下なとハ以上の月ハ尤題
又あし夜の月へ　後の月かしいかにもへし
一　海邊ニ浦ニ恋別あるへし　社頭神祇
又恋哥あるへし
一　早春乃題　立春をしるす　常にするし
又秋恋別なるへきや為[illegible]

一 発句にて季なき事ハ当季ハくるし
からずて他の季ハよろしからず作例もあれど
但かやうの事作例あれバとて細ニ用ゆハ
わろし
一 京都ハ常に見え流るゝ名所なれハ入
し月雪花ハ何にてもあれ何とも
めづらしき名所なるハよまぬ事也
されども秀逸にあれハくるしからず
一 三句の病ハ同心の病ニ而三ケ所の掛字
を嫌ふへし されハ細の句にハくるし
からず此のやうき 但三句合ニハ差違
嫌ふ同病とも紛るゝや
一 三句合ニハ月の発句ニ落ちる花ニ落花ハ讀
合すへし
一 ゆきあふなと筆法稀なれ共一神ニ走る
さてあるへきもの也へつきて候

春

霞のたつる　うつろひゆくる　花の宿ゝをる
あをやかなる　月とあかさる　露よおかるる
いつきさらぎ　花の露ふる　むの里ちる

みなとなびく　きしの小松　浪くだける

夏

あやめそふる　池くらき　雨の夕ぐれ

秋

吹はらふもさき　ゆふしもかれん　ゆふまでやしらね

かきくもる空は　わけゆくたる　露のみこぼるる

月やさえけれ　冬する浪に　霜立のぼる

われいかにある

冬

わするるも　こほりていける　嵐そふくなる

やよさむく　雪の夕ぐれ

恋

雲ある峯は　よそにてまちし　おもひあまれは

みてさへ浪の　ゆくもかね袖は　秋のこころさへて

むそぢの水に　たえまの　秋のさけける

明る日は雲の

雑

すゑの白雲　月も桜の　浪にあるとは

此詠歌の一折より　或は何も詠ある

ども人のつとめて　読てしるへん

詞なかく讀なかしもて

一 制詞の事

近代にはゝ禁制の詞あまたいてきて
いまさらにあたらしき事なり 或ハ為家卿
の一句に也しや殺りくさもあれし
或ハ其すまひのやうしさやうれるよ
あるへし 或ハ又あまたのよきさを筆
そてある人の人こそに是を用ひて
詠せさるまたやしらむ 人は云てとて
おもひなは外家用捨有へき人の事なれは
あるへし 又将来の為に縮ら候へ
次殺なと添ふて書加ふ也 所の芝やな
ど此まうハ之分明く申しおき

一 一句にて不用詞

言ゆき　浪たかし　吹あらし
深への里
咲文應中務の家乃百首人民部卿入道
の家にて亡又不て詠之也 惜やなきと
玉乃緒柳
みなすなは言合の題に後撰にも判せ云

末の句のをの字やすこしいひ出しまされると云
て仰らるゝよし順徳院御百首之定家
卿云玉乃緒柳此子細先度被尋も
しめ候ひきと云々

中〳〵みゆる

建久二年八月十五夜内裏歌合判者 末
句にて題合として其俊成卿女歌
建九月十三夜内裏歌合判者せしくは
おほそくもみゆる須に難せられは
此るこそすく外をかくまて近代歌之人

宜しさ

下云山之類
中務卿親王家三百首歌合之内書出し
判云風也と云詞にて一二句の中云文中
き文月歌合に山もや毋云やさく
西の山くれし 是ゆる秋の此 あわ字れ
わかひきて 吹らんそすれ 初をそえよる
方にこ流れし 方此いつはれ 花さうきかて
嵐出し 岩にし うききわ方
ひとへ山もや内裏にて子夢又献詠眼おゝそしや

極りしき
永應二年十月何某が宗旨家の後胤
判云ゆりきとをけるまことに哉
詞あしけるべし撰集には何しあれ
じとゆりきとりて詞の両こそのとは
あらぬことにいふべきなるべし後兼
二年左右判家の宗旨詞判とゆし
きとりて詞閑女が眼やうるに案して
庭葉らく（か）し波
為りきうれしき

莟書宗旨後成の判云あまりかや
侍らん又云ゆゑあさきと云詞なりやかる
ものゑいうふつくやうれしりておかる
かるまれしと云文字は東練の家かるへ
常にみえしむなしかるやうれしき
ことありてい常にもむましき事にそ
よそれし已に四字為に佛房がねにむ
此詞いうね（か）くあきこそにいへし
かるましきやうれしき例あ
つく

廣田社歌合承安二年十二月ゟ
俊成卿判云つく/\按するに歌よ
あしきやうや歌合建久六年正月日
判云侍るくの何とかやと申は
侍るきの詞にて艶にもや侍らん
千五百番歌合判云ゆゝしくいへる
これ侍るべきことば詞にはあらねど
かしこくおほくゆるさるゝとて侍るめり
さればこの歌にはまで此は詠
侍るべからず(も及ばぬ)此判のことは

海辺のことはいかにゆるすべきにの
雪の明ほの
御房にて歌合に俊成卿判云此雪の明
ほのといふはいまの世の人常に
このむ俊恵法師の詠じける詞也
されば何もゆるさるゝにや海辺
は俊成卿の四百首に思ひやるの
雪の明ほのといふはあまりにこのめる
海辺乃ゆふべは心ゆるすべき歌
春の夕ぐれ　秋の夕ぐれの

六百番判云春の明ほのハよにふるされたる
かくれなき秋の明ほのにこそ心の有
あさましくや

ともし

千五百番判云すきしゐの詞やあさまし
き様に聞ゆ又同つかひ判云とも
しといへる詞のあまりきこえすや
ゆうしん建保二年八月つかひの判に
ともしと云かは難きこしれねは又（すてかきを）
うちまかせてさのみもあさのさ夜とらす

今はつかひのめてたくそ

ましに

六百番六合判云ましの詞 庭常
きこえさるかな

うき人

建仁二年九月名所撰歌合に
後撰の判云うき人のといへるや
近きは人のみそいはれしとかや
よろきやうにや聞し侍る後うき
人とよめる哥難きこえさるにや かけ

なさけ

六百番歌合判云なさけある歌と
いひ〳〵侍るは詩のこゝろは
詞なれとこゝろみえけれ

月花紅葉をもてあそふ事

住吉歌合判云月花紅葉のこゝろ
もすりいとおかしくやと聞えける

なまめかし

六百番判云いろいとよくたるなる優哉
又云なまめけける詞又仙洞歌合

為家ニあそひかたくと云ハ歌をも聞侍

かくれて

崇徳院御百首ニ寄ゑて判云かくれの細
於愚意なきをきたる旨有まし

あてやか

千五百番判云あてやか優艶せしは
雅経但御室歌合にあてやか歌
きこえ候はしてかくきこえ侍まし

少ゆくなうの文字

御裳濯川歌合いひなされてといふ文字は

人のよしあしみて侍らんかなしかなよ
至りて候
東のすゝし
新熊野ニ而今ニ後撰ニ判云歌の体よし
其詞頗ニ无覺哉
思ひあへぬ心の程の杉なといふ詞ある哉
貞應元年九月ニ而今ニ定家卿判云
心をの中をとゝはあらてやうの詞は
よろしく侍るは流行よりよく侍る事にゝ
侍らん

地より
永萬二年重家朝臣家ニ而又はよした
いの字多ちりすといふ事みえ侍る
もしこれをあらきてゝる行しき詞にて
侍らん
月やあらぬ
定家卿の云かやうの歌にみえては
こそあれ
歌をわけしれ
定家卿云いとよろしやさうかもやあらん

あらやあられ

寛保三年十一月六条とうまて判云

あらやあられやとくすや閑て侍

人さいやかしれ侍く

こたつ

貞応之年七月関白家六条江

御判云こたつを年わすれ不審也

人心

貞永六条とう宮まて判云人心なといふ

みなみ子いゆはこうこゝちましきし

淋しあつき

うたゝき

六条とうまて判云うたゝきこれは

此詞いくゐかり当よろしき侍ば

郭公よいことかなりとや侍らん

紅葉しいもつさ

定の判とよめ当とれて乱しときてあや

あゆき

うとまて此比前いまき白きこえ

侍し朝ゆき

大かゝし

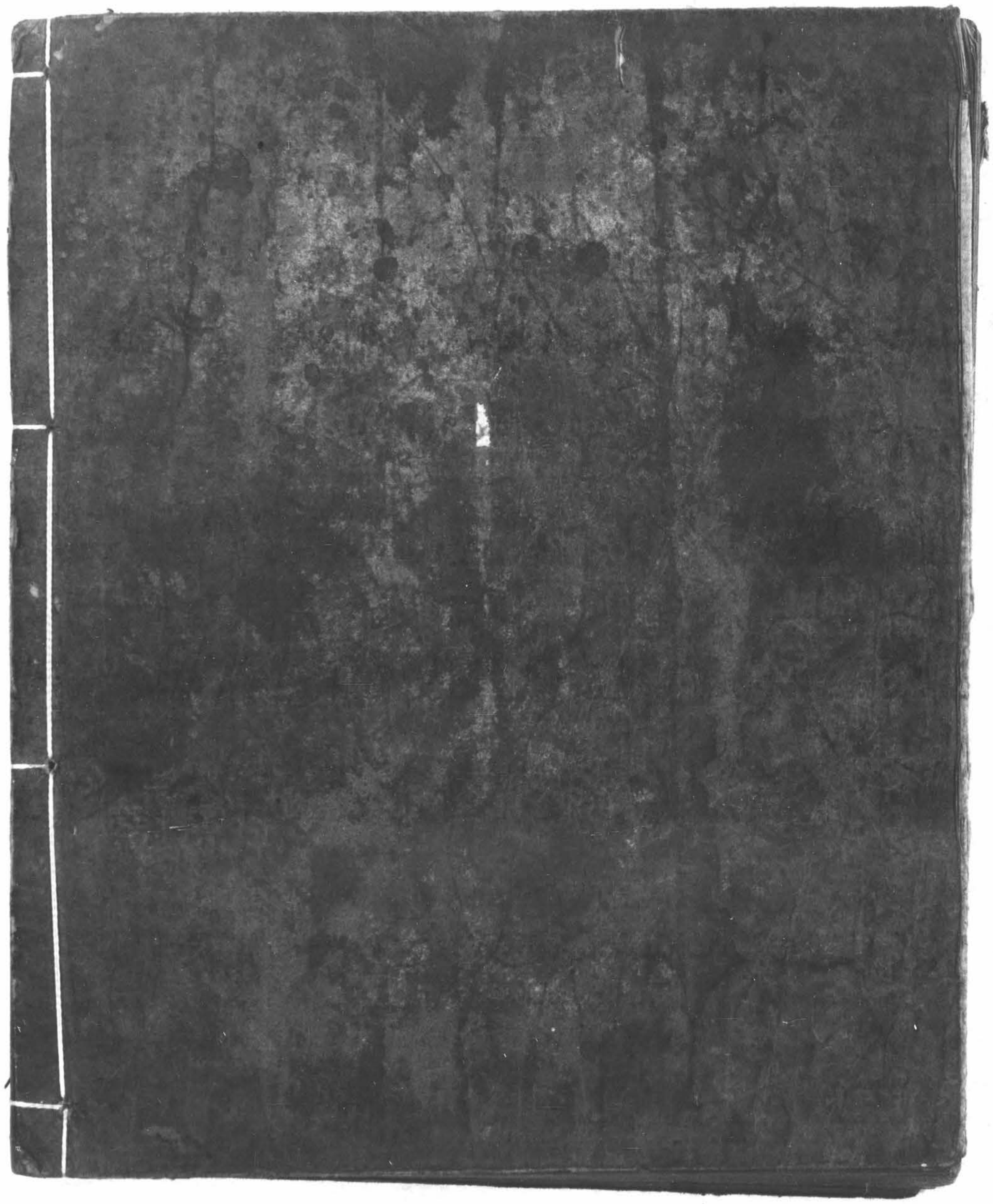
文永二年九月内家ヘ判云大かゝし風
芸深くそ侍る又云大かゝハ月細き
めそとこらよみ文字あれとも侍る字
なんハこれみな文字相応しかゝしこ
為家ヘ申侍る
はくを　櫻ちるなとはよ右方の文字
判敵なるへし
草の文庫
此方書にハ従備て文字細ゝやさしれ

但と年ハそての侍あるの
落ち所
是も左方ゝ文字なるま
此一巻道之秘事異他之間書遣松
田丹州志之名筆事未而為指南れ
こそ方也之

嘉慶元年十二月十二日准三后
後普光園摂政殿
御判
一校了

右和哥秘抄語一部遂
加書写今作一帖於座右
為披見也敢不可出窓外
耳矣
天正十九暦蠟月初四
玄旨　判

右一冊以自筆本令書写之
慶長六年正月十六日
一校畢　実顕

河野
[illegible]
[illegible]

九州大學圖書印